

火災現場からの声(1995年3月号掲載・田村 忠義)



自宅で就寝中、突然激しい揺れが襲い、たたき起こされた。家族の無事を確認し、すぐに北消防署ひよどり出張所へ駆けつけたところ、無線から応援を求める小隊長の叫びを傍受した。

早速、大隊長の指示で現場へ出動。高台から兵庫や長田の市街地を見渡すと、6カ所で黒煙が見られた。隊員一同は、「これは大変なことだ。このままだと、大火につながる。」と叫ぶとともに、頭の中を悪い予感がよぎった。

まもなく、長田区重池町の現場に到着。直近の消火栓に部署したが、使用できず、急遽防火水槽に部署した。しかし、距離が遠く、ホースを延ばすのに時間をとられた。現場は急坂の地にあり、しかも、木造や共同住宅が密集する一角で、7棟が炎上しており、一面が火の海と化していた。また、波立った道路の下からはガス炎が3メートル程立ち上がっていた。「小隊長、どこへ向かって放水すればいいのか」と、隊員の叫び声が聞こえてきた。放水する水には限りがある。無駄な放水は、極力避けなければならない。

燃えていない共同住宅から放水していると、突然大きな揺れに襲われた。どうやら、余震が続いているらしい。炎上中の共同住宅が屋内進入した建物の上に倒れかかり、建物の下敷きになりかけるといったこともしばしば。放水中は、そうした危険を背にした活動の連続であった。火勢はますます広く強くなり、消防車 1 台ではとても対応できなく、苦慮していたところ、応援隊が駆けつけてくれた。

しかし、ホツとする間もなく、新たに南側で火炎を確認し、急行した。この現場は、地震による被害が大きく、ほとんどの家屋が倒壊しており、建物としての形がないため、廃材を焼却しているのかと錯覚するほどであった。直ちに延焼拡大防止線を決め、集中的に放水を開始した。しかし、重なり合った瓦礫などで思うように放水できず、時間だけが経過する。最悪の場合、防火水槽の水がなくなると、消防車の転戦が余儀なくされる。そうなると、再び放水するまでの時間がかかり、火勢は広がっていく。

一方、救助を求める市民の声があちらこちらから聞こえてくる。時折、救助活動を優先しようとの思いが頭の中をよぎるが、消火活動を中断することはできず並行活動を指示した。建物の 1 階にいる生理めの者を救助するには、救助資器材が乏しい。我々消防隊が常備している鳶口や斧では十分に役立たない。近くの住民が鋸を寄せ集めてくれる。中にはチェーンソーを貸し出してくれた人もいた。

最初はスムーズに活動できたが、次第に燃料が切れ、結局はフルに活用できなかった。一方、防火水槽の水も底を尽き、応援隊の到着は 1 台もない。

このような最悪条件の中での消火活動には、我々消防隊と住民が協力して木材を除去したり、スコップ等で土砂をかけるといった地道な活動を展開した結果、4 時間後にはなんとか延焼を防止することができたのである。しかし、これ以降も我が隊 5 名は消火活動や救助活動への格闘が続いたのである。